資料で旅する仙台藩の「道」

松尾芭蕉が訪れた「武隈の松」

仙台市博物館　主幹兼学芸普及室長　樋口　智之

第6回

今号から、昨年十二月号まで連載していたテーマ「資料で旅する仙台藩の『道』」に戻ります。

今号は松尾芭蕉（一六四四～九四）の『おくのほそ道』に題材を採ります。

芭蕉も憧れた「武隈の松」

元禄二年（一六八九）三月二十七日に江戸を出発した芭蕉と門人・曾良は、五月三日に仙台領の白石城下（白石市）に至ります。そして翌四日の朝、白石を発ち、夕方には仙台城下に到着しますが、途中岩沼宿（岩沼市）で、奥州街道を少し外れて、「武隈の松」を見に行きます。なぜかというと、「武隈の松」は古くから都人が歌に詠んできた名松として知られていたからです。長い歴史の中で、松は失われてはまた植え継がれてきたことを、芭蕉は知っていました。それでもこの松を目にし、「今将千歳のかたちと、のほひて、めでたき松のけしきになん侍し」（今はまた千年を経たような端正な形となって、みごとな松の様子であった）と感嘆しています。

また、「根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしな（失）はずとし（知）らる」とも記しています。この松は、根元から幹が二本に分かれて伸びる独特の姿で、「二木の松」とも呼ばれました。現在、岩沼市に立つ「武隈の松」は、後世に植え直されたものですが、二またの樹形を継承しています。

「武隈の松」を描いた絵

ところで、芭蕉の没後およそ半世紀を過ぎた頃に制作された「仙台領分名所手鑑」という、仙台領内の名所三十箇所を和歌と絵で表した画帖があります。和歌は仙台藩六代藩主・伊達宗村（一七一八～五六）の書とされ、絵は幕府や仙台藩の御用をつとめた絵師・狩野典信（一七三〇～九〇）が描いています。画帖の中に「武隈の松」も取り上げられています（図1）。宗村にとっても、名所三十選に入れるべき松だったことが窺えます。そしてやはり根元から幹が二つに分かれる様子が表現されています。

また、大きな掛軸装の「松図」という作品もあります（図2）。松の名前は画面には書かれていないのですが、典信の描いた絵と同じ図様なので、これも「武隈の松」を描いた可能性があります。作者の狩野岑信（一六六二～一七〇八）は、芭蕉と同時代を生きた人ですので、一層興味が持たれます。

刊行されてきた『おくのほそ道』とは別に、草稿と目される芭蕉自筆本の存在が平成八年（一九九六）に確認され、世を驚かせました。これには「武隈の松」について「みどりこまやかに枝垂さがり」という記述も残されています。緑が濃やか、つまり葉が濃く深い緑色で、枝が垂れ下がっている、という表現は、岑信や典信の描いた松とよく符合します。世に聞こえた名松ですから、描かれる際も理想化がなされているかもしれませんが、こうした絵を縁に、芭蕉が憧れ仰ぎ見た松の姿を想像するのも楽しいものです。

なお、芭蕉はこの松について機知に富んだ句を詠んでいます。紙幅の都合でここでは紹介できませんでしたので、ご興味のある方は『おくのほそ道』をご覧いただけると幸いです。

図1　仙台領分名所手鑑より武隈の松
伊達宗村書　狩野典信筆　仙台市博物館蔵

図2　松図　狩野岑信筆　個人蔵